

○花のたましひ 金子みすゞ

散つたお花のたましひは、
み仏さまの花ぞのたましひは、
ひとつ残らずうまれるの。

だって、お花はやさしくて、
おつとひらいて、ほほえんで、
ぱつとあまい蜜をやり、

人々にあまい蜜をやり、
風がおひをみなくれて、
やはりのすなほについてゆき、

なきがらさへも、ままごとの
ご飯になつてくれるから。

仏教用語解説

【涅槃 ねはん】

煩惱の火が吹き消された状態の安らぎ、さとり境地。また、生命の火が吹き消されたということで、入滅、

次回例会

5月の例会は9名の参加者がありました。例会もやはり人数が多いほどにぎやかになります。一人でも多くの方のお越しをお待ちしております。一時間半のプログラムですが、次回からは15分程度の雑談会も設けたいなどと思っています。

■御文章（ごぶんしょう）②
《「白骨章」をあじわう》

「それ、人間の浮生なる相を・つらつら観ずるに、」

人間の定めのないありさまを、心しずかに考えてみますと、

「おおよそはかなきものは、この世の始中終、まぼろしのごとくなる一期なり。」

なんといいってもはかないことは、この世での、少年期・壮年期・老年期と、まぼろしのような一生涯です。

「されば、いまだ万歳の人身を受けたりということをきかず、一生過ぎやすし。」

一万歳も生きた人間がいるなど聞いたことはありません。一生はすぐに過ぎてしまうものです。

「いまにいたりてたれか百年の形体をたもつべきや、」

今、だれか百歳の身体を保っている人がいるでしょうか。

「われや先人や先、今日ともしらず明日ともしらず。」

私が先か、人が先か、今日とも明日とも知れません。

「おくれさきだつ人は、もとのしづくすえの露よりもしげしといえり。」

人の命に後先があるとはいえ、草木の根本におちるしづくや、葉末にやどる露のように、いずれは尽きる命なのです。

「されば、朝には紅顔ありて、夕には白骨となれる身なり。」

「すでに無常の風きたりぬれば、すなわちふたつのまなこたちまちに閉じ、」

寿命が尽きたならば、二つの眼はたちまちに閉じてしまい、

「ひとつの息ながくたえぬれば、紅顔むなしく変じて、桃李のよそおいを失いぬるときは、」

呼吸は永遠に途絶えて、元氣だった顔もたちまち肌色を失った時には、

「六親眷属あつまりて、なげきかなしめども、さらにその甲斐あるべからず。」

家族が集まって嘆き悲しんだとしても、もうどうしようもありません。

「さてしもあるべきことならねばとて、野外におくりて、夜半の煙となしはてぬれば、ただ白骨のみぞのこれり、あわれというもなかなかおろかなり。」

その後にするべきこととして、葬儀・火葬をして煙になってしまふと、ただ白骨だけが残るのです。それはもういい尽くせないかなしみです。

「されば、人間のはかなきことは、老少不定のさかいなれば、」

人の世のはかないことは、老若にかかわらずなことですから、

「たれの人も、はやく後生の一大事を心にかけて、」

だれもみな、はやく「いのちの行き先」という大切なところを求めて、

「阿弥陀仏とふかくたのみまいらせて、念仏申すべきものなり。あなかしこあなかしこ。」

阿弥陀さまの願いにすべてをまかせきったうえで、報恩念仏の心豊かな生活をするべきであります。

題材法話

では「正信偈」の中で最も大切な箇所とも言えます。そこでまず、この4句を簡単に意識します。



「本願名号正定業」

「至心信樂願為因」

「成等覺証大涅槃」

とができます。

○私がさとりを得る方法



と生まれさせて頂けるので
す。

しかも、「信じて念仏する」ことさえも、実は阿弥

陀様のはたきかけから生じるものであり、結局、全

てが阿弥様の差し向けによつて、この私が浄土往生

できるということです。

○浄土真宗のむずかしさ

は、願ひ事が大きければ大
きいほど、それを成し遂げ

るのには、困難や努力が大

私のいのちの問題を解決

ますから、どんなに複雑で

かと思いきや、全てを阿弥

力は、陀梯に必要としない。私の仰

るのです。
実はここが、浄土真宗・

お念仏の世界のすごさですが、同時に難しさでもある

の
で
す。

以下
次
号

